

3 近世後期村落社会における講組織の諸相

東北大学大学院生 大越 良裕

信州小県郡上塩尻村（現在長野県上田市字上塩尻）では、宝永三年（一七〇六）に幕藩領主が、仙石氏五万八〇〇〇石から久松松平氏五万三〇〇〇石に交代し、以降久松松平氏による支配は、幕末まで続いた。この信州小県郡上塩尻村（現在長野県上田市字上塩尻）では、近世後期たくさんの蚕種商人を輩出した。いっぽう上塩尻村では、近世後期に原家及び佐藤嘉三郎家が、庄屋（上塩尻村の村役人のトップ）を勤めたが、この結果両家には近世後期上塩尻村の支配関係や村落社会関係、及び蚕種商売関係の史料（原家～個人蔵、佐藤嘉三郎家～上田市立博物館蔵）が残されて、現在に至っている。今回はそうした史料を基に、中世末から近世にかけて隆盛する伊勢信仰を機軸として、上塩尻村の諸組織、特に様々な講組織を中心とした社会的諸相の分析を報告の目的とする。

上塩尻村を伊勢信仰との関連で見た場合、上田城下横町には伊勢宮があったが、この伊勢宮は、安永年間に修築されている。また、近世後期には、伊勢御師である広田筑後がこの上塩尻村や上田城下周辺地域を廻禮している。こうした状況から、上塩尻村では伊勢信仰がさかんであった一端が窺われる。それを裏付けるような伊勢参りの届け出の記述が、上塩尻村の「御注進帳」に多数残されている。「御注進帳」とは、上塩尻村の庄屋から領主に対して提出される上申書の村落側の控を写した文書記録である。この「御注進帳」は、原家や佐藤嘉三郎家が庄屋を勤めていなかった時期の記録はわかっていないものの、一八世紀後半から幕末期までの上塩尻村の概要を知る上で、重要な文書記録である。その「御注進帳」から、上塩尻村の伊勢参りの参詣者の人物名や年齢構成を分析することができる。その結果として、一八世紀後半から幕末にかけて、次の特徴が窺われる。まず第一点目には、年齢構成は一〇歳代から二〇歳代前半に集中しており、次いで三〇歳代後半から四〇歳代前半にも顕著な数字が見受けられるものの、はば広い年齢層が見受けられた。ただし、男性参詣者に限定された。第二点目として、一九世紀になると、二ないしは三年間隔で伊勢参りが行われるようになった。また一年当たりの参詣人数も減少していった。第三点目としては、伊勢参りの旅行の集団構成については、大きく分けて二つの形態が見受けられた。ひとつが一〇歳代ないしは二〇歳代前半のみで構成される参詣者集団であり、他方は一〇代後半から二〇代前半と年配者で構成される集団である。この伊勢参りの動向を基に、伊勢参りが、蚕種商人の旅や立ち振る舞いの訓練の場とする仮説を検証してゆく。その上で、上塩尻村での様々な講組織との連関の諸相を明らかにして行く。